頑張ってネギ君！…いやほんとに

小日本帝国

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
頑張ってネギ君！…いやほんとに

【Ｎコード】
Ｎ０５４６Ｐ

【作者名】
小日本帝国

【あらすじ】
もしも魔法先生ネギま！のネギ君に兄弟がいたら？そんなＩＦのストーリーです

嘘です安易な原作レイプ物です。

※基本更新は月一ですのであしからず

プロロ～グ（前書き）

微妙にクロスあり

プロロ〜グ

―某魔法学院―

―卒業証書授与―この七年間よく頑張ってきた　だが　これからの修業が本番だ　気を抜くでないぞ―ネギ・スプリングフィールド君！

「はい！」

厳粛な空気を漂わせ、宮殿を思わせるホール、その中に威厳が満ちた声が響き、続いてその場に幼い元気な声が響く。まだまだ幼いその少年の名はネギ・スプリングフィールド　赤が掛かった上肩辺りまである茶髪をゴムで後ろに纏めたくりくりとした目が可愛らしい美少年だ。　彼は返事をすると校長と思しき老人から卒業証書を受け取り、礼をしてその場を離れて行った。

「ネギもとうとう卒業…か、月日は流れるのは早いもんだのう。ロキやアスカが暴れてた頃が懐かしいわい…」

ネギへ卒業証書を渡したガッシリとした体格の白い長髪と髭が特徴的な老人―〇〇〇・スプリングフィールドは感慨深く呟く。

「此から先、様々な試練があの子を待ち受けるであろう…願わくば、あの子の道へ希望の光と幸があらんことを。」

孫の将来を心配して止まないその表情は、少し、暗い。

「と言うか、今のままの純粋なネギでいてくれ。ロキやナギに似る

のはまだ良い、だが、アスカみたいなアホの子の変態にはならんでくれ…いや、マジで…」

老人の思いは切実だった…因みに、暫くしてから困惑した様子のネギと、怒りを顕にしたその幼馴染みの赤髪ツインテの美幼女、そしてこれまた困惑気味のネギの従姉妹の金髪ロン毛の美女が突撃してきたのは余談である。

「日本で教師…ねぇ…ほほぉ…」

―夜―

スプリングフィールド家にて、ネギとその幼馴染み、アンナ・ユーリエウナ・ココロウァの卒業記念パーティを開いていた。

「うん、そうなんだよ姉さん。僕、ちょっと不安なんだ。日本の文化には興味あるけれど、あそこは人外魔鏡の巣窟だって昔母さんが言ってたし。」

「う～ん、そんなんでも無いけどなぁあの国は。確かに結界で隔絶された魑魅魍魎が住んでいるなんちゃら郷とか国の首都に超能力開発とか行なっているドデカイ学園都市が在ったりとか世界規模で格闘者のチャンピオンを決める何とかオブファイターズとかあるけど別に魔法世界に比べたら普通じゃない？」

「そっか～、じゃあそんなに心配しなくていいんだね、良かった～。」

「（え？何処がよ？てか魔法世界ドンだけ凄いのよ！？）」

ネギが相談している相手はネギの実姉、アスカ・スプリングフィールド。　スプリングフィールド兄弟の長女で長男、ロキ・スプリン

グフィールドとは双子である。流れる様な輝く金髪は腰までとどき、綺麗にパーツが整った顔はまだ幼さを残し、ニコニコとした表情が眩しい。ネギと同じくくりくりとしたマリンブルーの瞳がチャ～ムポイントだ。アーニャがなんか驚愕に満ちた表情をスプリングフィールド姉弟に向けたが二人は全く気付いていない。

「あ、そうだ！おねぇちゃん昔日本へ行った時に日本語習ってたから、ネギに日本の文化の素晴らしさもついでで教えてあげよっか？」

「ううん、姉さんって阿呆だから変な事しか教えてくれなさそうだから良いよ。」

「（うわぁ即答）」

「ガーン…ガーン…ガーン……うぅ、アーニャちゃん、ネギがおねぇちゃんを苛めるよぅ。」

「（あ～もう、疲れる人だなぁ）ハイハイ、ほら、ネギも悪気があって言った訳じゃ無いんだから泣かないの。ねぇ？ネギ。」

「え？」

「え？」

「あれ？」

こうして、夜は更けて行った…

「ネギは…日本へ行くのか。」

「えぇ、恐らく麻帆良へ送られるわ。メガロメセンブリア―完全なる世界―の魔の手から逃れるために。」

誰も寄り付かないであろう暗い夜の森の中、とある二人の男女が話し合う。女性はネギの従姉ネカネ・スプリングフィールド　そして男性―未だ少年と言った方が良いと言える幼さが残る顔立ちの背中まである赤髪を伸ばした美少年はスプリングフィールド兄弟長兄、ロキ・スプリングフィールド　ネギをそのまま5、6年成長させたらこんな感じになるだろうと言えるその容姿は父、ナギ・スプリングフィールドの若いころに酷似している。だが、見事な三白眼の鋭い目付きとディープブルーの瞳とエメラルドグリーンの瞳という特徴的なオッドアイがやはり与えられる印象がネギとまるで違い、目元が母親の特徴をも引き継いでいる。

「難儀なもんだな、ほんと。完全なる世界もいい加減しつけぇぜ。」

「そうね…ほんとは私も、ネギと一緒に行きたいけどアリアを放っておく訳にもいかないし。」

「俺も余りネギに構ってやれないが、まあ、日本にすこし滞在する時くらいは何とか出来るかもしんねぇし。…それに、アスカもいるからな。」

「それが不安だから、貴方に頼みたいんだけど…」

ロキの言葉にネカネはガックリと肩を落としながら呻く様に言った

「ははっ　まぁ、アイツの人柄は勿論人脈も中々馬鹿に出来ねぇ。いざという時頼りになるだろうよ。」

ロキは苦笑しながらネカネへ我が妹の有用性を示す。まぁネカネの言を否定しない辺り彼も色々と諦めている所もあったりする。

「…もう時間だ、ネギには卒業おめでとうと言っといてくれ。」

「…わかったわ。でも、日本で会った時には自分で言いなさいよ？ネギもこの頃貴方に会えなくて寂しがっていたんだから。」

「あぁ、わかった。」

ロキはそう言葉を残すと、一瞬後にはもう姿を消していた。

「…貴方も、気を付けてねロキ…私にとって、貴方達兄弟は大事な家族なんだから。」

月光が辺りを照らす中、ネカネのその呟きは、誰にも聞かれる事も無く夜の森に溶けていった

第一話～去らば故郷、ようこそ麻帆良へ（前書き）

長らく更新して無い割にはあんまり物語は進んでません

第一話～去らば故郷、ようこそ麻帆良へ

「此所が関東魔法協会の総本山、麻帆良かぁ…おっきいなぁ～。」

こんにちわ、ネギ・スプリングフィールドです。日本語も数ヶ月でマスターし、そろそろ日本の麻帆良への訪日する時期が近付いてきたので、折角だから軽い運動も兼ねて日本までずっと走って来ました。そう言えば、日本まで走って行くって言った時は何故かアーニャの口元が引きつってたけどどうしたんだろうね？まぁ、それはそうと思ったより早く日本へ来ちゃったから時間が余り気味です。まぁ、先は目的地である麻帆良へ行くのが先決であろうと思いまして彼の地へ足を踏み入れた訳ですが…

「何か強い認識疎外の結界と退魔結界がはってありますねぇ～…うざったいし壊しちゃおうかな？」

止めてください

「さて、麻帆良の見学は後回しにするとして、姉さんに散々勧められた“聖地・秋葉原”とやらへ行ってみますか。」

～秋葉原～

「さて…目星のゲームも手に入ったし、後は適当に衣装用の生地でも探して帰るとするか。」

秋葉原のとあるゲーム街、少女はある目的があってこの場所までそ

の足をはこばせていた。そしてその目的も達成し、後は帰るだけとなっていたが…

「はぁ、最近は疲れる事が多過ぎてろくに休めやしねぇ。…それに来月からは確か子供先生が来る筈だし、あ～もう面倒いなぁもう「何がですか？」ひゃわぁぁ！？」

何やら俯きながらブツブツと独り言を発し始めた少女。たまたまその少女の独り言の中で気になる単語を拾ったネギ少年は、疑問を解消する為に少女へ話しかけた。

「いきなり話し掛けるんじゃねぇ！誰…ってネギっっ！？」

「？お姉さん、何で僕の名前を知っているんですか？？」

「あ…その（しまったぁぁぁ！自ら墓穴を掘っちまったぁぁ！？てか何でこの時期に子供先生が日本に居るんだよぉぉ？やべぇ、思わず名前言っちまったぁぁ！！くそ、こうなったら誤魔化すしかない！えっと…）ひ、人違いだったー実は知り合いに君にクリソツでネギ・T・シルバーバーグって子がいてねーそれで君がそのネギかと思って思わず名前で呼んじゃったんだよーそしたら別人だったて訳さーいやー世界には似た顔をした人間が三人いるって言うしビックリしたよーうはははー」

「は、はぁ、そうですか。」

棒読みで一気に捲し立てる少女に若干引いたネギ。自分にそっくりのシルバーバーグとやらが気になったが、何だか聞いてはイケない気がして追及するのは止めた。

「あの、さっき子供先生って「では、私はよーじがありますのでこれにてー」言ってた…」

ネギが再度少女へ話し掛けようとしたが、少女は早々に言葉を切ると（しかもまだ棒読みで）そそくさと立ち去って行った。

「…変な人だったなぁ。」

もしこの場に少女が残っていれば、「お前だけには言われたくねぇ！」と憤慨しただろう。少女がこの台詞を吐く事になるのはもう少し先の話。

「うん、ゴッドイーターバーストってゲームをＰＳＰと一緒に店員さんから勧められるままに買っちゃった…どうしよう…折角だから、仕事の合間にやってみようかな？姉さんが言うにはゲームはやってみて損は無いって言ってたし。」

秋葉原の事がよくわからなかったネギ少年は、取りあえず目に付いたゲームショップへ入っていき、そこでゲームを買わされてしまった。

「次は何処に行こうかな～」

ネギ少年の秋葉原探索はまだ続く…

「あっと言う間に一ヶ月、何だか短かったなぁ。」

そう呟くのはネギ少年。今日が麻帆良来日の日だったので、パリッとしたスーツ姿におしゃれな紫斑の白ネクタイ（姉談）と気合いを入れた格好だ。因みに普段は何処にでもありそうな白のパーカーや青色のハーフパンツとラフな格好である。それはさておき、現在ネギ少年は麻帆良からの迎えを待っているのだが、使者が一向に現れず、待惚けをくらっていた。

「いつ頃来るんだろうなぁ御迎えの人…もう勝手に行っちゃおうかな～。」

ネギ少年の忍耐力もそろそろ尽きてた頃、一人の男性がネギの元へやって来た。

「やあ、久し振りネギ君、待たせてすまないね。」

「タカミチ！？うん、久し振りだね！……タカミチ…だよね？」

やって来たのは白いスーツ姿に白い短髪の銜え煙草がとっても似合いそうな無精髭を生やした渋めのお兄さん（オジサンでは無い。ええ、決して）どうやら彼はネギ少年の知り合いらしく、接する態度もフレンドリーなのだが、タカミチの姿…正確には顔を見てネギは疑問の声をあげてしまった

「はは、びっくりしちゃったかい？まぁ、あの頃に比べると大分印

象が変わったと自分でも思っているんだけどね。」

「うん、タカミチ…老けたね、随分と」

「ハハハ…」

ネギの呟きにタカミチは何処か遠い目をしながら乾いた笑いを零していた。何かを思い出しているのだろうか？

―麻帆良学園学園長室―

「むぅ…ここかの」

パチ

「はい、王手」

パチ

「ぬふぉ！？ま、まった、無し、今の無しじゃ！」

「駄目」

「いやしかし、まだ手があ」

「何をしても、もう詰みだよ？」

「ぬぐぅ…」

「私の勝ちだね」

「…はぁ、しょうがないのぅ…ほれ、ここに乗りんさい」

「わ～い」

麻帆良学園学園長室…そこで今し方将棋に興じていたのは個性的な後頭部や眉毛を持った老齢の男性と絹の様な綺麗な白髪を膝裏まで伸ばした少女、老人の名は近衛近右衛門、麻帆良学園の学園長にして関東魔法協会のトップである。そして少女の名はアタナシア・キティ。とある理由で麻帆良に滞在中なのである。

「ん～、近右衛門あったか～い」

「…こうしてると木乃香によく甘えられた事を思い出すのぅ」

因みにキティ少女は椅子に座った近右衛門の膝の上で猫よろしく引っ付いてる。

コンコンコン

「学園長、僕です。ネギ君を連れてきました」

「おお、入りなさい」

『失礼します』

「ほっほ、よく来たのぉ、儂はこの学園の長である近衛近右衛門じゃ。因みにこの娘はアタナシア・キティ、今は訳あってこの麻帆良に滞在しておる。仲良くしてやってくれの？」

「よろしくねー」

「ネギ・スプリングフィールドです、よろしくお願いします！近衛学園長、キティさん」

「うむ、元気があってよいよい。さてネギ君、早速じゃが本題に入ろうかと思うんじゃが良いかの？」

「はい」

学園長はそれまでの和やかな雰囲気を一遍させ、真剣な表情をするとその眼光をネギ少年へ向ける。

「宜しい、ではネギ・スプリングフィールド、君はマギステル・マギ（立派な魔法使い）に成る為の修業としてこの麻帆良学園で英語の教師をして貰う。宜しいかな？」

「はい、よろしくお願いします！」

「まぁ、先は三ヵ月間の教育実習とゆーことになるのう」

「はあ」

「其れでは早速今から君の受け持つクラスへ行ってもらおうかの。」

「え？い、今からですか！？」

「うむ。しずな先生、入りたまえ」

「はい」

学園長の呼掛けに応えて入って来たのはウェーブの掛かった流れる様な金髪を膝裏まで伸ばした眼鏡をかけた知的な雰囲気を醸し出す妙齢の女性。

「彼女は指導教員の源しずな君、わからないことがあったら彼女に聞くといい」

「よろしくお願いね」

「あ、ハイ…」

「住む場所は後で伝えるからの先は君のクラス、２―Ａへ行ってみなさい。」

「はい、わかりました」

「ネギ君、不安かも知れないけど大丈夫だ。皆良い子たがらね、僕が保障するよ。多少個性が強いが」

「タカミチ…うん、僕やってみるよ。」

そう言うと、ネギは失礼しましたと挨拶した後指導教員のしずなに手を引かれながら出て行った

「行っちゃったね、ナギの息子君」

「そうだのう…どうじゃ？キティ、おぬしの目から見た彼は」

「ん～、スプリングフィールド一族全体から見たらそれなりに魔法の才能があるってくらい？特別視する何かがある様には見えなかったなぁ。」

「ほ、それはあの一族での中の話じゃろう？一般の魔法使いから見たら十二分に規格外じゃよ。」

「そうだね。」

「あんまり興味が無さそうじゃのう。」

「そうでもないよ？あの子から何だか不思議な匂いがするし。」

「匂い？」

「うん、不思議な…『世界の外側から来る人』の匂いに似ている。」

キティがそう言葉を零すと、途端に学園長とタカミチの表情が強張る。

「キティ、それは…」

「ううん、大丈夫。あの子は『世界の敵』なんかじゃ無いから」

キティは、万人を魅了する優しい微笑みを浮かべて言った

第二話～それはそれは不思議な出会いとゆー訳でも無かった～（前書き）

ヤッツケで書いているので展開は割と適当です。

第二話～それはそれは不思議な出会いとゆー訳でも無かった～

「今日新しい先生が来るんだって～」

「へー、どんな先生だろうね」

「若いイケメンが良いなぁ…」

「生理的嫌悪感を醸し出す脂ぎったキモ面でぶオタだったりして。語尾にでぶーとか付いてそうなの」

「あぁ、常に息使いが荒くてハァハァしてる上に美少女アニメの女の子キャラがプリントされたシャツを着こなすバットガイね。＋αで童貞だったり」

「うぁ、そんなん来たらどないしよう」

「言いたい放題だねアンタら…」

此所は麻帆良学園中等部2‐Aクラス…マンモス校故に膨大な生徒数をほこり、一学年につき幾つものクラスが存在するが、こと2‐Aはそんな特殊な学園の中でも更に異彩を放っていた

「え～、じゃあ守は美人のおねぇさんがえぇの？しずな先生みたいな」

「イヤ、興味がねぇなぁ。強いて言えば、個性が溢れ過ぎて天限突破してない先生なら誰でもいいよ」

「あはー、それは流石にそんな人は早々出ないんちゃうか？」

「どうだろうね～麻帆良だし～何が出て来ても驚かないよ～」

「麻帆良だから仕方が無い」

「なにそれ恐い」

「（新しい先生って、やっぱり原作通りあのガキンチョだよな…この前合ったし…あぁ、でもどうなんだろ…もはやネギま！の原作もクソも無いしなこの世界）…もしかしたら性格が違うかも知れないかもな（ボソッ）」

「ん？ちうタン今何か言った？」

「何でもねぇよ。あとちうタン言うな」

２-Ａは他学年、又は他クラスに比べて男子学生が少なく、留学生が多い。また、学年テスト成績最上位級の人間が５人いるにもかかわらず、それ以上にテスト成績最下級の人間が多いため学年成績順位は最下位である。

「皆さん、そろそろＨＲの時間ですよ！早く席に着きなさい！」

先程まで喧騒の絶えない２-Ａメンバーであったが、艶やかなストレートの金髪を太ももあたりまで伸ばした凛々しい雰囲気を漂わす美少女～クラス委員長である雪広あやかの一喝によって各々が自分の席へ着いた。それでもまだ生徒達の話し声が騒々しいのは変わらずだが

ガラガラ

「失礼します」

「あ、例の先生、来たみたいよ？」

女子生徒Ａ「ちょっ、女子生徒Ａてあたしの説明適当過ぎない！？」に促されて扉の方を見れば…

「…子供？」

そう、子供がいた。ネクタイの趣味とか色々ツッコミどころがあるが、そこにはまだ十歳にも届くか届かないかの外人の少年が居たのである

「ええと…今日からこの学校で英語を教えることになりました、ネギ・スプリングフィールドです。不束者ですが、どうぞよろしくお願いしますね」

『……』

「…あれ、なんか間違えちゃいましたか？」

自己紹介したネギ少年だが、何の反応もこないことを不思議に思い、何か自分の挨拶に駄目な所があったのか不安になって聞いてみたが

『『えぇぇぇぇ！？』』

返ってきたのは疑問詞の大合唱だった

「はい、これが2‐Aのクラス名簿よ」

「あ、ありがとうございまふ！」

「ふふ、緊張してきちゃった？」

「うぅ、はい…僕がこれから教える生徒達は、皆お姉さんお兄さんばかりですから…」

「はやくみんなの顔と名前覚えられるといいわね」

「は、はぃ…」

「（こうして見てみると、やっぱり普通の子供ね…スプリングフィールド一族は子供でさえ化け物だって聞くけど）」

2‐Aクラスへ向う中、ネギ少年と指導教員のしずなは軽い談笑をしていた。とはいえ、話の構成はこの学園とこれからネギの受け持つクラスについてが殆どだが

「い、いっぱい…覚えられるかなぁ…」

ネギ少年はクラス名簿を見てその人数の多さに参っていた

「ほら、ここがあなたのクラスよ」

「は、はあ…もう、着いたんですね。」

「ええ、もう着いちゃったわね（緊張のし過ぎかな？小動物チックな挙動が可愛いなぁ……えぇ、本当に）」

ゾクッ

「っ！急に背筋に悪寒が…何でだろう？」

「どうかしたの？（あら、イケないイケない…思わず少年を愛する心が口から涎として漏出るところだったわ…それにしても、感の鋭い子ねぇ）」

「いえ、何でも無いです…さて、それじゃあ早速…」

貞操の危険を感じたネギ少年だったが、それもすぐにおさまったので気のせいかと断定することにした。そして、彼は身構えると今までの頼りない雰囲気を一遍し、凛々しい表情で２‐Ａの教室の扉へと手を掛けた

「失礼します」

「何で子供が先生なの！？」

「外人さんなのに日本語上手やねー」

「ハァハァ…ショタ先生…も、萌え～」

「おい、誰かこの犯罪者予備軍を警察に突き出せ！」

「あらあら…最近の若い子は元気いっぱいで良いわねぇ」

「そ、そんな一遍に詰めよられても困りますぅ！」

先程までの凛々しい雰囲気は何処へやら、あっと言う間に揉みくちゃにされ、ネギ少年は情けない姿を晒す事になった。指導教員のしずなはその様を微笑ましい物を見る目で見守っていた。

第二話～それはそれは不思議な出会いとゆー訳でも無かった～（後書き）

最近買ったテイルズ（マイソロ３）にハマってしまって執筆が全然はかどりませんｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0546p/

頑張ってネギ君！…いやほんとに

2011年2月23日16時32分発行